

『華嚴經関脈義記』について

李 恵 英

本稿は法蔵（六四三～七一）の八十華嚴經觀を探究する前段階として『華嚴經関脈義記』の作者を検討するものである。

法蔵撰『華嚴經関脈義記』（以下『関脈義記』と略）一卷（大正蔵四十五巻所収）は、法蔵の八十華嚴經の最初の注釈書として知られるが、法蔵の多くの著作の中で真偽の議論の対象となった書物の一つである。^{①②}

『関脈義記』は『華嚴經』を「四勢」によって簡潔に解釈したものである。これに『六十華嚴』を対象とするものと、『八十華嚴』を対象とするものとの二本があり、大筋では同じであるが、微妙に異なる所もある。法蔵の作品にはほぼ撰号があるのに対して、この書物には撰号がない。日本の目録が法蔵の撰述とするだけである。また「四勢」による分析は法蔵の他の著作には見出せない。これらの点から少なくとも、法蔵の真撰とすることには疑問が残る。しかし、もし法蔵の著作でないとするならば、なぜこの著作が法蔵に仮託された

のか、誰がそれを行ったのかという新しい深刻な問題に直面することになる。

一方、もしこの著作を法蔵の真撰とするならば、法蔵の何時ごろの著作なのかという疑問も出て来る。以上の問題を踏まえて、経録と『八十華嚴』に対する注釈を中心として、前の『六十華嚴』の注釈と『探玄記』を対応しながら、探究してみたいと思う。

『関脈義記』は、中国、韓国の目録にのっていない。日本の書目にのみ残るものである。その中、①円超録（55/1132^⑤）、②永超録（55/1145）③凝然・五教章通路記巻一（72/297上）④凝然・華嚴宗経論章疏目錄（日仏全一）⑤高心目錄⑥松原恭讓目錄⑦石田茂作『写経により見たる奈良朝目錄』⑧金沢文庫目錄は、ともに法蔵撰とする。とくに凝然（一二四〇～一二三二）は『五教章通路記』巻一に法蔵の著作として提出し、『章疏目錄』にも取り入れるし、写本として写したこともある。^⑥以上のことからみれば、ある程度、凝然はこの作品を法蔵撰と

してみとめていたと推測される。しかし一方、⑨義天録(55/118)は「開脈一卷・文超述」と述べ、⑩前田慧雲目錄は「澄観撰」と記す。

以上からみれば、『関脈義記』の作者は法蔵、澄観、文超の三人が挙げられ、書名は『関脈義記』と『関脈義』の二種類がある。しかし『関脈義記』と『関脈義』は同一の書物であるかどうかは今の所は不明である。さらに、上にあげられている三人のなか、法蔵は従来『開脈義記』の作者とされているが、しかしほんとうに法蔵で適当であろうか。この問題については、後で本文から検討してみようと思う。

次に澄観は『華嚴経疏』卷三(35/526)、『随疏演義鈔』卷一六(36/122)では、華嚴経題の解釈において、「展演無窮」、「卷撰相尽」、「展卷無碍」などの題名で『関脈義記』の本文を引用しながら、華嚴経題を解釈した。これによれば『関脈義記』の作者は澄観であるとはいいがたいが、少なくとも澄観の時代にすでに存在していた書物であることが窺われる。

最後に文超は法蔵の弟子の一人であるが、残っている資料が少ないので、詳しく文献の対照研究ができない。周知のように、宗密の『華嚴経行願品疏鈔』卷一と卷四、『円覚経略疏鈔』卷一に、ともに文超の作品として引用している。しかし『金沢文庫資料全書』に現存しているただ一つの文超の断篇である『華嚴経義録』^(?)一卷によれば、文体が似ていないの

『華嚴経関脈義記』について(李)

・経題(関脈・八十華嚴) 最清淨 法界 智 因 理 用 体 果 大方広弘華嚴—經 宗趣—理智因果	・経題(関脈六十華嚴) 清淨 法界 智 因 理 用 体 果 華 弘 大 方 廣 經 宗趣—理智因果	・経題(探玄記) 大方広—理実法界 弘華嚴—因果縁起 因果縁起—理実法界を以て宗と為す 宗趣—因果・法界
・九会(関脈・八十華嚴) 理—大方広(十海等) 智—華嚴(十智) 因—威光童子等修行果—蓮華藏世界海 一会—七会—八会—九会 ↑ ↑ ↑ ↓ 無尽重々会 昇降不同、総有九箇会 ・部類(関脈・八十華嚴) ①下本 ②中本 ③上本 ④一切転一切転説本 ⑤十仏所説円融之本	・八会(関脈六十華嚴) 理—五海 智—十智 因—莊嚴童子 果—依正両報 一会—七会—八会—無尽重々 ↑ ↑ ↑ 会 昇降不同、総有八箇会 ・部類(関脈六十華嚴) ①下本 ②中本 ③上本 ④広本 ⑤無尽無尽一 切重々の本	・八会(探玄記) 初品—教起因縁分 舍那品—華果勸案 生信分 二会—六会—脩因契果生解分 七会—託法進修成行分 八会—依人入証成德分 此五分皆依前起後文次相生、義理具足、是故不増減也。 ・部類(探玄記) ①恆本 ②大本 ③上本 ④中本 ⑤下本 ⑥略本

『華嚴經閼脈義記』について（李）

で、文超の作品ではないと推測される。

以上経録によって作者を簡略に検討してきたが、以下、本文によって作者を検討してみよう。本文は「展転無尽」、「巻撰相無」、「巻展無碍」、「問答取之」の「四勢」によって展開しているが、重点は「巻」と「展」にあり、内容はそれぞれ経題、九会、部類に分けられる。『探玄記』と対応しながら、纏めてみれば以下の通りである。

右の表から見れば、『閼脈義記』は華嚴経題とその宗趣を理・智・因・果より捉え、九会（八会）を互いに関係させて、重々無尽で説明する。部類においても「一切転一切転説本」、「無尽無尽一切重々の本」等があり、「理・智」と「重々無尽」のことを強調している。一方、『探玄記』は「因果・法界」を以て華嚴経題を解釈し宗趣とする。八会も五分五周因果であり、部類も「恒本」にとどまる。以上のことから見れば、『閼脈義記』は「展」、「巻」を重要視し、「重々無尽」の思想に重点を置いていることが窺われる。実際法蔵は『探玄記』巻四（35/173）に「展転生」という概念に基づき、「由縁起門中、有此相作等義、成一多故、故云展転生也、此即一多互展転相生故」として相入・相即の理論体系を築き上げたのである。さらに『閼脈義記』初めの「巻則一言無外：展則塵算難知：聴習数年、弥増愛樂、依傍師訓、有少見聞、私記為篇、名為閼脈義記」という序文から見れば、『閼脈義記』の作者

六八

は法蔵の側近の弟子で『探玄記』を詳しく知り、その「展転巻撰」の概念を用い、この書物を書き上げたのではないかと推測される。（註省略）

〈キーワード〉 法蔵、『閼脈義記』、展転無尽

（東京大学大学院）

掲載されなかった諸氏の発表題目②

新資料・仏陀三蔵の『華嚴両卷旨帰』について

織田顕祐（大谷大学講師）

浮屠と祖霊

入澤 崇（龍谷大学講師）

道綽浄土教の問題点

佐藤 健（佛教大学講師）

迦才『浄土論』諸本について

坂上雅翁（淑徳短期大学助教教授）

『浄土論』にみられる恩について

釋舎幸紀（高田短期大学教授）

新出『語灯録』浄写本七巻について

西村岡紹（叡山学院教授）

還相廻向の起源

梶山雄一（佛教大学教授）